

主の降誕 夜半のミサ
福音朗読 ルカ 2・1-14

2022.12.24 18:00

カトリック高円寺教会
主任司祭 高木健次神父

クリスマスのたびごとに、わたしたちは救い主が幼子の姿でわたしたちの間にいらっしやったというこの聖書のみことばを聞きます。幼子、赤ちゃんたちはそのまま受け取らなければならない、そういう存在です。だから、それは「神様の救いを、あるいは救い主をあなたたちは条件を付けずに受け取りますか？」っていう神様からの問いかけのようにも思います。同時に、それぞれの中にいらっしやるイエスをわたしたちがお互い同士受け取り合うことができるかという問いかけでもあるかもしれません。

ありのままを受け取る。わたしたちの心の中には自分のありのままを受け取ってほしいっていう思いがありますね。だからお互い同士がそれができたら、ほんとにそれは素晴らしいわけですけども、「あなたはそのままがいい」っていう言葉をかける、それはお互い同士に対してほんとに簡単なことじゃないんですよ。「あなたはそのままがいいんですよ」って言うことができる人には二通りいます。一つは「あなたはそのままがいいんですよ。わたしには関係ないから」っていう、そういう人は「あなたはそのままがいいんですよ」って言葉を軽々しく口にすることができます。一方で、ほんとに相手のそのままを受け取っていかうと決めている人は、それがほんとにどれほど難しいかを知っていますから、なかなかその言葉を言えません。でも、一所懸命態度の中でそれを示そうとします。つまりは、相手のそのままを受け取るためには、自分がそのままではできないんだ、自分が変わらなければならないんだ、ということを知っている人です。子育ての、赤ちゃんをそのまま受け取って行く——イエス様だって赤ちゃんだからマリア様とヨセフ様もそうだった——ためには自分の計画とか自分のことは置いて、赤ちゃんのことを最優先にしていかなきゃいけないし、大人同士だってお互い同士のことをそのまま受け入れようと思えば、自分が変わらなければならないということを実感していくっていうのが、本気でそのことを思う人の経験なんじゃないかなと思います。

ここで、今日幼子のところに呼ばれて来たのが羊飼いたちだっていうその聖書のことを思い起こしたいと思います。いろんなことをそこから読み取ることができますけど、羊飼っていうキャラクターの一つに象徴的な意味が込められているんだという

説明を聞いたことがあります。羊は家畜ですね。動物が飼いならされた状態で、そして、その動物を導いていくのが羊飼いですね。

わたしたちの中にある^{けもの}獣性。聖書の中の獣の王様っていうのは蛇なんです、ライオンじゃなくてね。蛇は哺乳類じゃないのに獣なんです。で、その獣の中で一番賢かったのは蛇である。どこにでも入って来て、そしてわたしたちの心に語り掛けます。「あなたは神様のようになれます。あなたは神様のようなべきです」。つまり、自分を中心にしないで、自分の都合を第一に考えなさいっていう呼び掛け。で、アダムとイブの物語はその呼び掛けに人間が神様が中心なんじゃなくて、神様の言葉じゃなくて蛇の言葉に従っちゃったのでいろんな問題が起こって来たっていうのが聖書の最初ですね。そういう「自分を最優先にしないで、自分中心です」っていうのが、聖書が言う^{けもの}獣性なんです。それをわたしたち誰でもが心にも持っている。それをなくすことはできないんです。でも飼い慣らしていく、そして導いていく、っていうのが羊飼いの一つの象徴的な――当時の職業の羊飼いの人たちがそういう人たちだったって言うわけじゃないんですよ。でもそこで動物を飼い慣らし、そして導いていくっていうその中に象徴的な姿が込められているんだという解釈ができる。で、その人たちだからこそ幼子の所に行って幼子そのままを受け取ることができるっていうふうを読むことができるんです。

だから、わたしたちがほんとにお互い同士ありのままを受け取り合いたい、そのためには、実はわたしたちが自分を中心に、自分のことを受け取ってほしいっていう思いを、消し去ることはできないけれど、ちゃんと飼いならしていかなければいけない。何によってですか？ 愛によってですよ。相手のことを大切に思えば、自分が変わっていけるんです。

イエス様はわたしたちのことをありのままに受け取る。そのための姿が十字架の姿です。やっぱりそこには苦しみが伴うんだけど、でもそれを越えてわたしたちと共にいてくださる方なんです、ということもいつも、ミサのたびごとに思い起こすわけです。わたしたちもお互い同士、「わたしを受け入れてください」、「わたしのほうの言い分を聞いてください」と言い合うんじゃないで、相手を「あなたはそのままでいいんです」、「いえ、あなたこそそのままでいいんです」と、こう言葉にするとちょっと変だけど、そういうふうに入れ合うように努力できたら良いと思います。それは簡単な道ではない。本当にそうしようとすればするほど、それは難しいことが分かる。分かるけれども、なんとか自分の心の羊飼いになっていくっていう、自分を中心にしようというものを歩み寄って神様のみことばによって導いていく者でありたい、その希望は失わないようにしたいですね。そして、そういう人たちがいればこそこの世界にまだ希望があるということなんだと思います。

わたしたちそれぞれ、お互いの一番身近なそして大切な人たちをほんとうに受け入れようと、共に歩もうと、簡単じゃないですがいろんな形で経験しながら、でも務めている者同士だと思います。そこにお生まれになった幼子の恵み、わたしたちと共に歩むために、神様だけ人間に歩み寄って人間になられた、その方の恵みを見出しながら、それぞれお互い愛のうちに受け入れ合う関係を務めていく、そのような者でありたいなあと思います。

今日わたしたちの中に新たに救い主を心にお迎えいたしましょう。そしてお互い同士を——それは簡単ではない——苦労の中で受け取り合う道のを歩んでゆく者でありますように、互いのために祈り合いながらこのごミサをお捧げしたいと思います。

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>